古墳人たちからの生活辞典

～甲を着た古墳人と人々の暮らしを紐解く～

群馬県立中央中等教育学校　１年　小松美羽

1. はじめに

⑴動機

甲を着た古墳人が現れた!!

私の目は、その見出しに釘付けになった。

私は、群馬県の古墳や埴輪が大好きだ。特に、前方後円墳の造形美と、細部まで細かく表現された精密な上野毛国の埴輪が好きだ。だから、昔から県内の古墳に行っている。群馬県には、貴重な歴史資料が多くあるため、古墳時代の人々の様子がよくわかる。古墳時代にタイムスリップした気分で、古墳人たちの気持ちに思いをはせると、どきどき、ワクワクするのだ。

大和政権に次ぐ大国であった上野毛の国では、どんな人が暮らしていたのだろう。どのような生活を送っていたのだろう。興味がわいたため、調査してみることにした。

⑵研究方法

①群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘情報館に行き、資料から学習する。
②埋蔵文化財事業団の方に、お話を伺う。
③金井東裏遺跡に、実際に行ってみる。そこで、古墳人の気持ちに思いをはせてみる。
④金井東裏遺跡の近くの、古墳時代の住居があった遺跡である黒井峯遺跡でも、現地調査をする。

2. 金井東裏遺跡とは？

⑴金井東裏遺跡概要

上毛三山の一つであり、雄大な榛名山。この榛名山が、古墳時代に２度も大噴火を起こしていた。その榛名山の麓に位置する、渋川市の金井東裏遺跡。そこの火山灰と火砕流の下から、なんと！古墳人が見つかった。

平成 24 年 11 月 19 日、世界中がアッと驚いた大発見！古墳人が火砕流堆積物と火山灰の下から、甲を身に着けて発掘された。付近からは、首飾りを付けた古墳人と、２人の乳幼児の骨も発見されている。

自分の疑問：なぜ、古墳人の骨が残っていたのだろう。

⑵群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘情報館と文献で調査

《古墳人たちが暮らしていた村を襲った突然の大噴火の流れ》

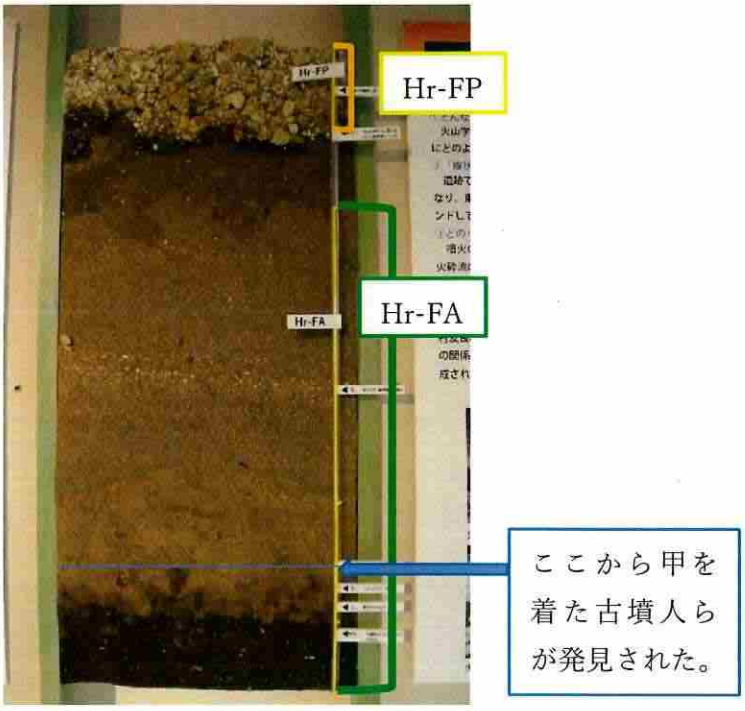
①火山灰が辺り一面を覆いつくした。

この時点では、人々はほとんど無事だったため、各地の遺跡から火山灰の上に足跡が発見されている。馬のひづめの足跡も確認されていることからも考えられるように、古墳時代の群馬では、馬も多く飼育されていたのであろう。人々が、馬も連れて急いで安全な場所に避難したということは、確実だ。

②熱くてどろどろの火砕流が、時速１０８kmのすさまじいスピードで山麓の村を襲い、飲み込んだ。

甲を着た古墳人を含む４人の古墳人は、その火砕流に飲み込まれてしまい、そのまま1500年間眠り続けていた。

金井東裏遺跡には、２つの５世紀後半の円墳がある。その二つには、葺石が葺かれていたのだが、火砕流によって流され、葺石がまばらになっているということを、埋蔵文化財調査事業団の方から教えていただいた。墳丘に並べられた葺石も、火砕流のスピードを語っている。



↑金井東裏遺跡の剥ぎ取り地層　発掘情報館にて撮影

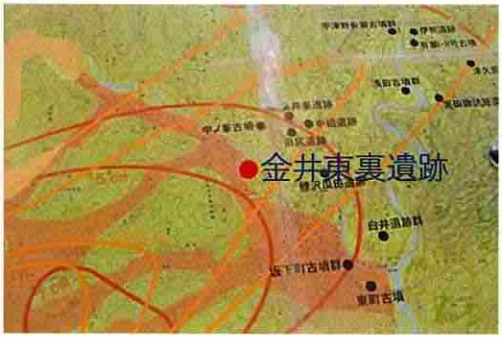
↑金井東裏の模型　古墳の葺石がとんでいる

古墳時代の１回目の榛名山大噴火の噴出物→**Hr-FA**（榛名二ツ岳渋川テフラ）

２回目の榛名山大噴火の噴出物→**Hr-FP**（榛名二ツ岳伊香保テフラ）　という。

甲を着た古墳人らは、１回目の噴火のHr-FAの火砕流に飲み込まれて、その上からHr-FPが覆いかぶさっていた。つまり、甲を着た古墳人らは、二重の噴出物でパックされ、真空パック状態となっていたのだ。

また、ここの遺跡では、浸透圧の関係で、下の方の層に水分が浸透しないキャラピーバリアが形成されていた。それにより、火砕流の下の層にいた甲を着た古墳人らは、人骨も残りやすい乾燥した状況の層の中で眠っていたのである。



↑榛名山二ツ岳の大噴火で積もった火山灰と火砕流　かみつけの里博物館にて撮影

⑶金井東裏遺跡に行って現地調査

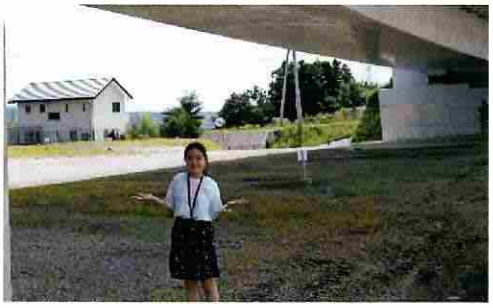
←4人の古墳人の位置関係

↑榛名山二ツ岳の見える方向

調査日は、曇っていてよく見えなかったが、この方向に二ツ岳が見えるらしい。

ちなみに、甲を着た古墳人は実は榛名山二ツ岳の姿を見ていない。なぜなら、榛名山二ツ岳は古墳時代の大噴火によって形成された山だからだ。生き残った古墳人たちは、さぞかし驚いたことだろう。

↑古墳人が最後に見たと思われる景色の方向



↑金井東裏遺跡

金井東裏遺跡の土は、さらさらしていた。

ちなみに、金井東裏遺跡がある渋川市の旧子持村の特産品はコンニャクイモである。火山灰によって乾燥している子持村の土は、美味しいコンニャクイモを作るのに適している。私は、現地調査に行った際に、遺跡の近くでコンニャクイモを栽培している農家の人と会い、お話を伺うことができた。その方によると、金井東裏遺跡から甲を着た古墳人が発見された 11 月は、コンニャクイモの収穫の全盛期であり、その方も、遺跡の隣にある畑でコンニャクイモを収穫されていたそうだ。すると突然、「なんか出てきたぞー！」と、大きな声がして、甲を着た古墳人が発見されたようだ。近所の人から貴重なお話を聞かせていただき、よかった。

自分の疑問：金井東裏遺跡のある場所には、元は何があったのか

⑷埋蔵文化財調査事業団の方に質問

金井東裏遺跡は、上信自動車道を作るために調査をしていた時に偶然見つかった遺跡だ。

そして、道路の建設の前は、やはり、畑であったそうだ。何の作物を作っていたかは、所有者ではないためわからないが、そこもコンニャクイモを作るには良い環境の土地であった。

金井東裏遺跡のあった場所の畑では甲を着た古墳人パワーで、美味しい作物が実っていたのではないだろうか。

それから、二ツ岳の大噴火は、初夏、5月ごろだったということも分かっている。なぜなら、水田が耕してあるのに、まだ苗が植えられていないからだ。古墳人たちも、コメを育てていた。

火山の噴火は、当時の人々にとっては、不運な出来事であり、地域のリーダーであった甲を着た古墳人を亡くした悲しい事件であったことだろう。しかし、その大噴火がタイムカプセルとなり、21世紀に暮らす私たちに5世紀ごろの様子をそのまま伝えてくれたのだ。

②榛名山二ツ岳と金井東裏遺跡の位置

←二ツ岳と金井東裏遺跡の位置　発掘情報館にて撮影

金井東裏遺跡からみて二ツ岳は、南西8kmほどの場所にある。

3．甲を着た古墳人

⑴甲を着た古墳人データ

↑甲を着た古墳人　レプリカ　発掘情報館にて撮影

甲を着た古墳人

金井東裏遺跡で発見された古墳時代の男性

年齢…40代　　身長…164㎝（当時としてはやや高め？）　左利きの可能性が高い。

渡来系の特徴を持つ。子供時代は、上野毛国以外の場所で過ごし、成長後に上野毛国へやってきたと考えられている。今のところ、甲を着た古墳人が上野毛国に来る前にいたとされている場所は、長野県の伊那地方ではないかと考えられている。ちなみに、首飾りの古墳人も、同じく伊那地方からきたのでは？と考えられている。

⑵甲を着た古墳人の所有物

↑1号甲　古墳人が身に着けていたもの

↑衝角付冑

↑矛

←鉄鏃

←2号甲

〈甲を着た古墳人が所有していたもの〉

・小札甲　小札 1800 枚の貴重品　組紐で編まれている

・横矧板鋲留衝角付冑（よこはぎいたびょうどめしょうかくつきかぶと）　小札 800 枚を使用　甲を着た古墳人の顔の下から発見　額の上から頂辺に衝角　てっぺんに羽のような飾り

・銀・鹿角併用装矛（ぎん・ろっかくへいようそうほこ）　古墳人の南西 7m の地点で出土　柄は発見されていないが推定 2.4m　本体の下に　銀と鹿角の飾りがついた珍しいもの　鹿角には直弧文が刻まれている

・鉄鏃（てつぞく）　鉄の矢のようなもの　25 本出土　全てに鹿角製の球形の飾りがついている　切っ先を東に向けて発見　これは、切っ先を上にして矢入れ具に収められていたものが火砕流で倒れたことによる。

・堤砥（さげと）　砥石に穴を開けて組紐を通した携帯用の砥石

・刀子（とうす）　小型の携帯用ナイフ　柄は鹿角製で、細かい模様が刻まれている

・赤色顔料

・小札甲（2 号甲）　小札 950 枚　鹿角製の小札　革紐で編まれている　巻かれた状態で発見

自分の疑問：甲を着た古墳人は、どのような立場の人物だったのだろうか。

⑶発掘情報館と文献で調査

《古墳人の人物像を探る　3 つの着眼点》

1. 甲を着た古墳人は、最新技術の高級品である小札甲を身に着けているということからも考えられるように、地域のリーダー的な存在であったと考えられているようだ。この小札甲は、組紐で編み上げた当時の最先端の品である。これは普通の人が普段身に着けているようなものではなく、大古墳から出土するような貴重品である。実際、高崎市の井出二子山古墳からは、鉄製の小札甲の破片が見つかっている。

　このように、高価な小札甲を身に着けていた甲を着た古墳人は、地域の有力者であり、大和政権とのかかわりもあったのではないだろうかと考えられている。そして、もし、火砕流に飲み込まれることなく生存していたとすると、大古墳に葬られた可能性のある人物なのではないかとの指摘も出されている。

2. 古墳人は甲の内側に、堤砥（さげと）と刀子（とうす）を下げていた。堤砥は、腰に提げることができる砥石で、刀子は小型のナイフのことである。一般的な刀子の柄は木製だが、この甲を着た古墳人は、鹿角製の柄で、細かい線の模様が刻まれた珍しい刀子を持っていた。そして、堤砥と刀子を一緒に提げる風習は、4～5世紀の朝鮮半島の王族や貴族の風習であった。

このことからも、甲を着た古墳人は、朝鮮半島に縁のある、有力者であったと考えられる。

3. 古墳人は、筋肉が発達していた。それも、左肩や太ももの筋肉が発達していた。

左肩の発達は、古墳人が左利きであったことを示す。おそらく、左利きで弓射をしていただろう。

太ももの発達は、乗馬に慣れていたということを示す。馬に乗ることが出来るのは、有力者のみ。

以上のことから考えられるように、甲を着た古墳人は地域のリーダーであり、朝鮮半島に縁のある人物だった。

自分の疑問：鉄製の小札甲と、鹿角製の小札甲では、どちらの方がランクが上だったのだろう。

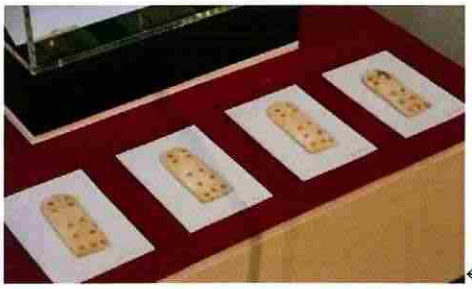
⑸かみつけの里博物館で調査・学芸員さんに質問

学芸員さんいわく、小札甲自体がとても希少なものであり、そもそも発見されることも少ないそうだ。井出二子山古墳でも、鉄製の小札甲の破片しか見つかっていない。そして、鹿角製の小札甲は、日本では金井東裏遺跡のみ、日本以外でも、韓国で４世紀の朝鮮半島の百済時代のものが見つかっているだけだ。だから、鹿角製の小札甲は出土例が少なく、比較できないため、どれほどのランクのものなのかがよくわかっていないようなのだ。

裏面→

↑金井東裏遺跡の鹿角製の小札甲（レプリカ）
発掘情報館にて撮影

↑井出二子山古墳の鉄製の小札甲
かみつけの里博物館にて撮影



←鹿角製の小札

自分の仮説：甲を着た古墳人は、祈りをささげていた。

⑹文献で調査

甲を着た古墳人は、何をしていたのだろう。古墳人は、両手で兜を押さえてそこに顔を伏せ、うつぶせの状態で発見された。膝をがっくりとついて曲げていながらも、片脚を一歩踏み出したような姿勢で、山の方向を向いていた。なぜ、古墳人は噴火する山の方を、流れてくるすさまじい量の火砕流の方を見ていたのだろう。安全な場所へと逃げるのであれば、山には背を向けて倒れるはずだと思う。

今のところ、甲を着た古墳人は亡くなる直前に、

①火砕流の犠牲になってでもムラ人たちを守るために、火山の方を向いて神に祈っていた。
②噴火のさなか避難する途中で襲ってきた火砕流から身を守ろうとして、とっさに身を伏せた。

という、２つの説が有力で、専門家の間で議論になっている。どちらにせよ、甲を着た古墳人は多くのムラ人たちが逃げるギリギリの最後まで、遺跡の場所にとどまっていたのは確かである。

ただし、甲を着た古墳人の周囲には、マツリの道具が多く見つかり、祭祀用の武器や武具を配置したと考えられている。また、甲を着た古墳人のいた金井東裏ムラからも、マツリの道具が多く出土している。大量の重ねられた土師器や１万点を超す滑石製臼玉、管玉やガラス小玉やきれいな勾玉が発見されている。このようなことからも推測できるように、金井東裏遺跡があった場所一帯は、祈りの場であったのだろう。

つまり、金井東裏遺跡がある祈りの場所では、

１．噴火する前から、祈りをささげていたにもかかわらず、ついに榛名山二ツ岳は噴火した。

↓

２．そこで甲を着た古墳人は貴重な甲や武器を用意して配置し、自らも武装して祈願をした。

↓

３．しかし、祈りはむなしく、火砕流に飲み込まれて窒息死した。

という流れが推測できる。甲を着た古墳人は、小札甲と冑を身に着け武装し、前方に鉾を置き、（あるいは立て、）身の周りに武具を配置し、山の神を鎮めて噴火を止めようと、祭祀を執行していたようだ。

４．黒井峯遺跡

⑴黒井峯遺跡概要

黒井峯遺跡は、古墳時代の集落跡であり、日本で最も有名な遺跡の一つである。榛名山二ツ岳の２度目の噴火によって、集落が丸ごと埋まったこの遺跡は、同じく火山災害で壊滅したイタリアの古代都市ポンペイにならい、日本のポンペイと呼ばれている。

この遺跡からは、畠や家畜小屋、作業小屋、柴垣、竪穴住居はもちろん平地建物、道など、他の遺跡では見つけることが困難な数々の遺構が発見された。

黒井峯遺跡は、

①首飾りの家　②種火のある家　③稲穂のある家　④裏庭のある家　⑤裏木戸のある家　⑥家畜飼いの家

の６つの単位群から構成されている。

黒井峯遺跡からは、奇跡的に晴れたため、二ツ岳の雄大な姿が望めた。高台にある黒井峯遺跡では、気持ちの良いさわやかな風が吹いていた。きっと、古墳人たちもこの風の中で過ごしていたのだろう。

ベンガラとは？

ベンガラとは、古墳時代に多く使用された赤い塗料。

赤には神聖な意味があり、埴輪の着色料として使われたり、石室を塗ったりするために使われた。

⑵黒井峯遺跡の単位群ごとの特徴

①首飾りの家

首飾りの家（竪穴住居）から出土したもの

・水晶の首飾り　・ベンガラが入ったハマグリの貝殻

家の隣には畠があり、小区画に区切られている。

現在の畑とは違い、１区画の大きさは、長さ３m、幅 50～90 cmほどの小さなもの。こんもりとした畝の表面は、柔らかい。

土層の断面の観察により、同じ場所を何回も耕して、使っていたことが分かった。

②種火のある家

〈種火のある家（平地建物）の特徴〉

・土間の２か所の焼けた跡。

そのうちの１つは、火山災害時にも種火が残っていたようで、屋根が陥没するまで熱を保っていた。

その種火により、出火した。

平地建物は、竪穴住居と違い、地面を彫り込まずにそのまま床にする。
中に太い柱はなく、草の壁と一体化した細い柱が屋根を支える。壁ぞいの床には、
座ったり寝たりするための板や植物を敷いた土座を設けて、そこで生活していたようだ。

③稲穂のある家

〈稲穂のある家（円形の平地建物）の特徴〉

・堤瓶（ていへい）という水がめを据えるくぼみ

・1500 年前の稲穂！

棚の上から落ちたと思われる、ひっくり返って脚がとれた高坏（たかつき）の中から、稲穂が発見！1500 年前の人々が汗水たらして作った稲穂は、閉ざされていたため鮮やかな色をしていた。しかし、瞬く間に色は変色。それでも、一握りの稲穂が現代と 1500 年前を、時空を超えてつないでくれた。

・近くの道には 2 か所の T 字路

どうやらここは、古代の交差点だったらしい。古墳人たちも、自由にどこでも歩き回っていたわけでなく、道路を使用していたようだ。

道幅は、約 30 ㎝。古墳人たちも、道を歩いて近隣の住民と出会い、明日に向かって進んでいったようだ。

④裏庭のある家　⑤裏木戸のある

〈裏庭のある家と裏木戸のある家の特徴〉

・祭祀を行う場所

繰り返し祭祀が行われていた。

潰れて平らになった土師器や高坏、土器、土の塊と石が散乱していた。祭祀には、樹木を伴うものもあったようで、倒れた樹木があった。

・作業場

2 棟並んだ平地建物の隣。さらに隣には畠。作業場は、人が頻繁に歩き回っていたため、土が固くしまっていた。畠は、区画ごとに柔らかいところと固いところがあったため、全ての畠が常にフルで使われていたわけではないようだ。

・竪穴住居の周りの土

水の侵入を防ぐために、土を 20 ㎝ほど積んでいた。この土は、どうやら竪穴住居を掘った際の土のようだ。

・竪穴住居の壁は、網代（あじろ）といって茅などを編んで作ったすだれ状のもので覆われていた。

⑥家畜飼いの家

〈家畜飼いの家の特徴〉

・馬小屋

馬小屋は、2～4 つの部屋と通路で構成されている。1 頭ずつ入るように、板で仕切りが作られ、丸い木や板が敷き詰められていた。

【古墳人にとって馬とは？】

馬は、今でいう高級車！馬は朝鮮半島からやってきて、各国の、古墳に埋葬されるクラスの王たちが、権力の象徴としても乗っていた。埴輪に飾り馬が多いのも、そのためかもしれない。そして、群馬の馬は、最高級ブランドであり、「群馬」という名前も、「馬が群れていた」からついたのだ。この馬小屋で上野毛国が誇る馬が飼育され、大和朝廷に献上されていたのかもしれない。

↓古墳時代の馬の大きさ

・巨大な竪穴住居や作業小屋、高床倉庫

巨大な竪穴住居…1 辺 9m と類を見ない大型で、煙突とカマドも確認。ただし、災害発生時には人が住んでいなかった。

作業小屋……むしろを編む際に使う重りの石がまとめて置かれていた。

高床倉庫……中は空で、災害後に荷物を取りに行き、その後放火されたことが調査によりわかっている。倉庫のわきには小さな祭祀を行う場所があり、土器類がまとまって出土した。土器に交じって、臼玉も出土した。

・近くの道の五差路

道脇には石が集められていた。いずれも、土を掘った際に出た邪魔な石で、ほとんどが自然石。数点、縄文時代の石器が紛れていた。邪魔な石をとりあえず道端に集める、、、遠い昔を生きた古墳人たちの、あふれ出す人間味に、親近感を感じ、思わずくすりと笑える気がする。

○黒井峯遺跡の単位群に属さない場所

〈黒井峯遺跡の単位群に属さない場所の特徴〉

・2 か所の共用の水場

そのうちの 1 つの水場は、自然の湧水を利用していて、水をせき止める板が残っていた。水深 10 ㎝ほどの水が常に溜まる仕組みになっていて、内部には洗い場や甕（かめ）置き場が設置されていた。

もう 1 つの水場は、自然の湧水地で、発掘中も水が湧き出していた。噴火に驚いて慌てて逃げ出したらしく、堤瓶（ていへい）がそのまま置き去りにされていた。

黒井峯遺跡には、2m にも及ぶ軽石が積もったため、ムラは生活していた状態のままでパックされた。そのため、丁寧に軽石を取り除くと、ムラ人たちが踏み固めた道の筋や畠の畝の様子、建物の柱の穴さえもがはっきりと分かった。

↑二ツ岳

↑黒井峯遺跡

5．終わりに　～まとめと感想～

発掘情報館に、こんなメッセージがあった。

「遺跡は先人たちの残してくれた生活辞典。歴史への憧憬は、生活の原点を確かめるための無限の旅への始まり。埋蔵文化財は道しるべ」先人たちも、この地で暮らしていたことを示すものが、文化財だ。そして、それを知ることは、旅である。タイムスリップの魔法の旅行だ。

甲を着た古墳人は、火砕流に飲み込まれながらも、当時の暮らしの様子や地域のリーダーの使命など、沢山の

生活辞典を私たちに与えてくれた。

金井東裏遺跡の発見も、黒井峯遺跡の丸ごとパックされたムラの発掘も、数々の奇跡によって成り立っている。この奇跡、古墳人たちからのメッセージを受け取り、発信していくことが私たち現代に生きる人の使命だと思う。

今回の研究を通して、古墳人たちの生活の様子を知り、古墳人を今までよりも身近な存在のように感じられるようになった。ここで得た知識は、これから先に古墳に行くときに、新しい見方を作り出してくれると思う。今後も、古代上野毛国において生活していた古墳人たちからのメッセージをもっと受け取るべく、知れば知るほど奥が深い、東国文化を追求していきたい。

参考文献

・東国文化副読本　2020 年 4 月発行　　・東国文化副読本　2014 年 4 月発行

・埋文群馬　No.60　2019 年 2 月 28 日発行　群馬県埋蔵文化財調査事業団

・最新情報展　令和 2 年度　第 1 期展示　きらめく武具を身に着けて　金井東裏遺跡
令和 2 年 4 月 19 日～10 月 11 日　展示資料　群馬県埋蔵文化財調査事業団

・令和元年度ぐんま考古学講座　古墳人、現る　金井東裏遺跡の奇跡　2019 年 7 月 13 日　講座資料
群馬県埋蔵文化財調査事業団

・日本のポンペイ　史跡　黒井峯遺跡　渋川市教育委員会

・東国文化ガイドブック　ぐんま東国文化ものがたり　2019 年 3 月発行　群馬県

行った場所

・群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘情報館　　・金井東裏遺跡　　・黒井峯遺跡

・かみつけの里博物館　　・保渡田古墳群井出二子山古墳

古墳人たちが私たちに伝えてくれた生活辞典、それを知り、生活に生かして未来に伝えていくことが私たちの使命です！

甲を着た古墳人は、そのメッセージを伝えるために現れてくれたのではないだろうかと思います。ありがとう、甲を着た古墳人さん

1500 年前の人々の様子を伝えてくれる生活辞典を開けば、東国文化の新しい世界が広がっています。

今後も、生活辞典の続きを探しに、古代群馬の無限の歴史旅行へ、文化財の道しるべを頼りに Let go!

私が作った踊る埴輪